

前方後円墳の築造企画と単位 (4)*

宮川 渉

9 非対称前方後円墳の検討

前方後円墳の外形について書かれた多くの概説書だけでなく、調査報告書や研究に関する専門の著作にさえ、前方後円墳の外形は左右対称であることを大前提にした記述や論考が依然としておこなわれている。

わたくしたちが共同研究として前方後円墳の築造企画の研究成果の一端を、最初に発表してからすでに20年近い歳月が流れた。

当時発表した「前方後円墳築造企画の基準と単位」の中で、「前方後円墳はシンメシカルである」という大前提で研究が進められている傾向に対して、設計・企画から築造過程で生じる誤差率や、後世の変形を見込んでも到底シンメトリカルにならない前方後円墳も多く、左右対称を意図しながら誤差によってできた「歪み」とはみられないものがあることを指摘し、築造当初から意図的にア・シンメトリカルな設計・企画で築造された前方後円墳もあるのではないか、という問題提起をおこなってきた¹⁾。

前方後円墳の築造企画や設計・企画を研究対象にする場合、前方後円墳の主軸線が後円部中心点を通り前方部前端線の中央に位置するように設定して、前方部前端線を左右均等になるようにするのは問題があり、後円部中心点を通った主軸線は前方部前端を二等分する位置に設定するのではなく、前方部前端線に直交する位置に設定し、その結果、前方部前端線が左右非対称になったものを検討対象にするのが築造企画の研究の基本である、という主張をおこなった。

そして、そうした実例として大阪府古市古墳群

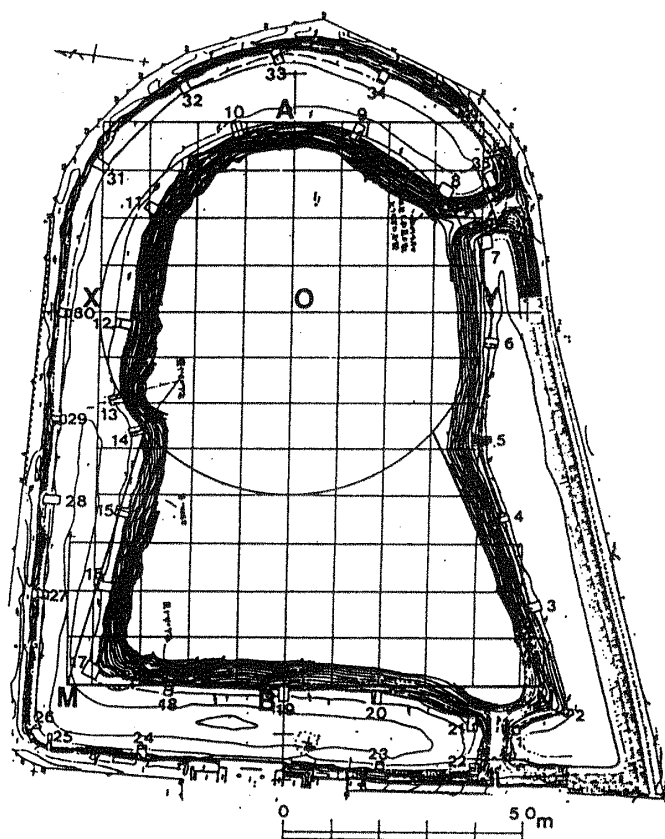


図1 高屋築山古墳の築造企画の推定復元

4区型、1区6ヒロ、1ヒロ約164センチ
後円部直径X-Y・8区約78.72メートル
墳丘長A-B・12区約118.08メートル
前方部幅M-N・10区として約98.40メートル
番号は調査トレンチの番号を示す。

(原図は「書陵部紀要第45号『平成4年度陵墓関係調査概要・安閑天皇古市高屋丘陵整備工事区域の調査』の付図を一部改変、加筆。墳丘左側(南側)の周堀外形線は、陵墓地形図と合成したもの)

の高屋築山(城山)古墳(安閑陵)を取り上げて、特異な「片直角型」前方後円墳が存在するという指摘をしてきた²⁾。

高屋築山古墳についてはその後の「陵墓」営繕

※受付 1997.8.31

※※〒590-0015 堺市南田出井町4丁4-6

整備工事によって、高屋城の本丸築城による変形を受けた結果、わたくしたちが最初に主張したような特異な「片直角型」前方後円墳とはやや異なることが判明したが、その調査結果をもとにして築造企画の検討をおこなっても、後円部に対して前方部が左右非対称であることが逆に補強されることになった³⁾。

高屋築山古墳については、当初5区型の築造企画を推定復元していたが、書陵部による調査の結果を参考にして築造企画を検討すると、4区型の推定復元が想定されるようになり、あらためて築造企画の再検討を加えてこれまでの見解に修正をおこなったものを図1に示した。

それについてはすでに論考を加えた別稿によるとして⁴⁾、本稿では先に問題提起した特異な「片直角型」前方後円墳の類型を補強して、あらためてこのような左右非対称の築造企画をもつ前方後円墳が厳然と存在し、地域を越えてそうした非対称の前方後円墳築造企画が、正確に伝承され伝播して分布している実態を明らかにすることによって、先に発表した小論を補強したい。

高屋築山古墳で最初に提起した特異な「片直角型」前方後円墳の存在することが奈良県天理市別所大塚山古墳⁵⁾、同宇陀郡大宇陀町アカサカ古墳⁶⁾で証明され、さらに類例の増えることが指摘される⁷⁾。

もっとも、わたくしたちは前方後円墳はすべて左右非対称に設計・企画ないしは築造企画されている、と主張しているのではない。厳密な意味での左右対称の設計・企画ないしは築造企画で造営されている前方後円墳はつぶさに検討してみるときわめて限定されてきて、それだけに、厳密に左右対称に築造されている当該古墳の造営背景が重要な問題を含んでいることを考えなくてはならない。

墳丘は左右対称に造営されながら、非対称部分が墳丘の外側の周堀や外堤に移り、外郭部分で非対称の築造企画をとる非対称の様式化の展開をなしているとみられる前方後円墳（例えば大山古墳）のような事例もあるが⁸⁾、本稿では極度に墳丘が非対称に様式化したものに限定し例示にした。

（1）片直角型墳丘の定義

築造企画からみた「片直角型」墳丘

ここで非対称墳丘をもつ前方後円墳を築造企画的に明確に規定するために、「片直角型」墳丘についてあらためて整理してみたい。

前方後円墳の築造企画は図2で示した「築造企画の方形区画の地割」を基本として設計・企画されていることは繰り返して再三述べてきた通りである。前期前方後円墳は、前方部の幅が後円部直径と同じ8区の範囲（枠）に収まるように築造企画されているが、中期に入る前後からこの後円部直径と同じ「枠」を超えた前方部幅を築造企画にとって築造される前方後円墳が出現してくる。

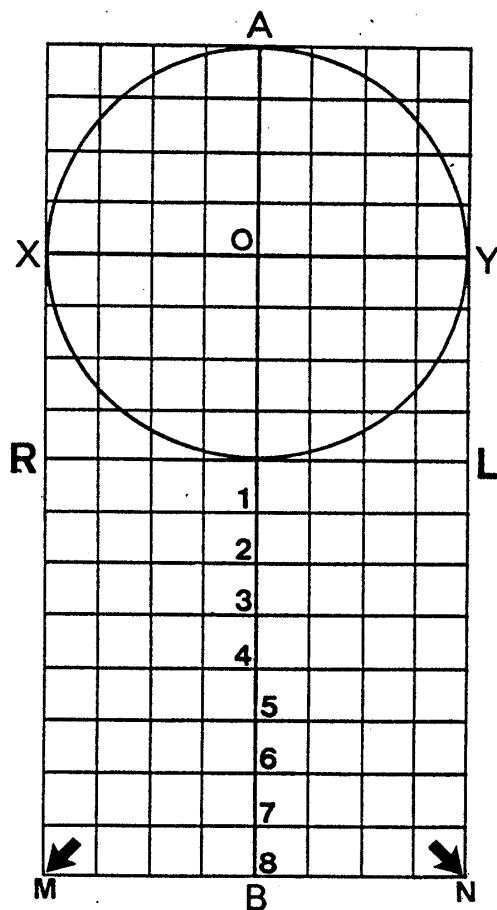


図2 前方後円墳築造企画の方形区画と「片直角型」墳丘をつくる位置
左右の前方部隅角のいずれかの一方が、MないしはNの矢印の位置にくるように築造された墳丘を「片直角型」墳丘とする。ここでは8区型前方後円墳の場合の「片直角型」の前方部隅角の位置を例示した。

これは、後円部直径が前方後円墳の築造企画では絶対的な基準であり、前方部の長さは被葬者の出自や系譜性を表徴する意義をもつとともに、短小な1区から4区までの築造企画で造営されたいわゆる帆立貝形古墳の範疇に入る前方後円墳は、階層的身分秩序の中で従属的な身分秩序を前方部の長さに表徴する「約束事」を反映しているものとみることができる。

前方部の長さの築造企画にそうした意義をもたせたものであるとすれば、絶対的な基準である後円部直径に対して前方部長さは、「鍵穴型図形」を構成するためには相対的な基準であり必要条件といえる。

さらに、前方部の幅は前方後円墳が築造された時期によってその幅が変動する要素をもった築造企画のもとに造営される部分で、「鍵穴型図形」が形式化または様式化して変動していく変化を、築造企画の中に容易に取り入れやすい条件を備えている部分といえる。

したがって、前方後円墳の各類型やタイプに関係なく絶対的な基準の後円部直径。類型各タイプを通して付随する前方部の長さの相違によって、それぞれの被葬者ないしは造墓集団の出自、系譜、または階層的身分秩序を表徴し、恣意的には動かせない前方部の比率（長さ）。その幅と高さを変動させることによって、前方後円墳形を立体的にもっとも変化させやすい前方部の幅と高さの3つの要素から構成されている立体的複合図形で、一元的な「鍵穴型図形」として固定化したものではない。

このうち前方部幅は、その設計・企画が比較的自由に変動しやすい要素をもっているにもかかわらず、左右いずれかの前方部隅角が図1に示した幅8区の範囲内に止まって後円部側面から前方部前端の角を結ぶ「直角」の中に収まるように築造企画された前方後円墳が少なからずみられる。

この場合、反対側の前方部隅角はこの8区の「枠」を超えて外側に張り出すように設計・企画され、前方部は明確に左右非対称になる。この非対称の部分は「区」を単位にして明確に読み取ることができるので、本来、左右対称に築造しようとしながらその過程で「誤差」が集積して非対

称になってしまった、というようなものではなく、明らかに当初から非対称に設計・企画して墳丘を築造することを意図した築造企画が存在したことを示している。

こうした築造企画を示す前方後円墳を「片直角型」前方後円墳と位置付けている。一般的な傾向として、前方部の短小な1区型から4区型までの前方後円墳（帆立貝形古墳の類型）では、前方部が短小なこともあって前方部の幅が後円部直径の8区を超えることは5区型から8区型の定型化した前方後円墳に比べ少ない。

6世紀代に入った古墳時代後期の高屋築山古墳の場合は図1に示したように、4区型前方後円墳として前方部幅が後円部直径を超える築造企画で築造されている。

（2）非対称の墳丘の様式化と伝播

コナベ古墳型非対称墳丘

奈良市盾列古墳群のコナベ古墳は5区型の築造企画をもつ古墳時代中期の前方後円墳で、拙稿「前方後円墳の築造企画と単位（1）」の図7にも示したように、「片直角型」墳丘と前方部側で斜向する非対称の築造企画を示す古墳である⁹⁾。

本古墳の前段階的な時期に造営された大阪府藤井寺市の津堂城山古墳は、やはり5区型の築造企画をもつ同型、同大の前方後円墳で、コナベ古墳にみられる非対称墳丘の初源的な前方後円墳の可能性が考えられるが、墳丘が戦国時代に城砦に利用されたために変形を受けていて、現状では築造企画的に明確に確定できないため、この5区型タイプの前方後円墳としてはコナベ古墳を、5区型類型の標識的な「片直角型」非対称墳丘の基準とする。

図3に示した築造企画の推定復元図のように、墳丘左側前方部隅角が築造企画の方形区画の直角の中におさまり、右側前方部隅角が1/2区方形区画のマス目から出る。前方部正面の周堀外形線はRからLに斜向し、墳丘、周堀ともに古墳全域が非対称に築造企画されている。

このコナベ古墳型の非対称築造企画は、菅田御廟山古墳（応神陵）、太田茶白山古墳（継体陵）、久津川車塚古墳（築造企画を裏返している）など

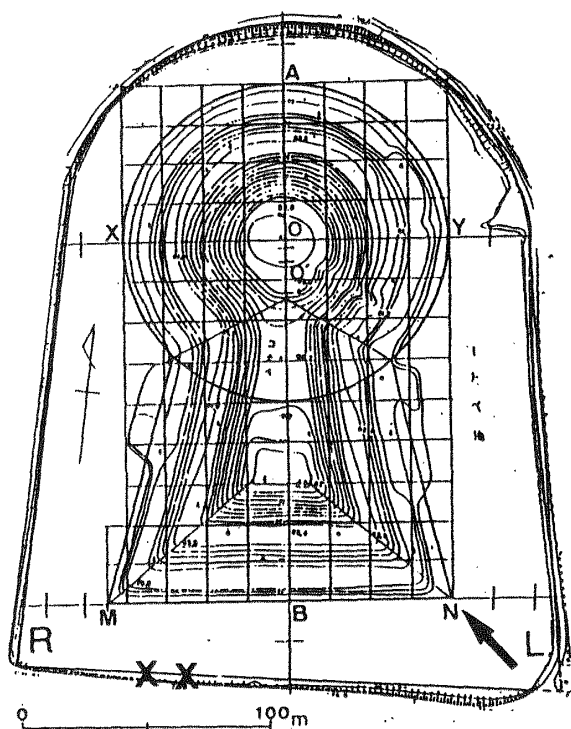


図3 コナベ古墳の築造企画の推定復元
5区型、1区10ヒロ、1ヒロ約163センチ
矢印のNが「片直角型」の前方部隅角部
前方部正面の周堀の×印は円筒埴輪列の
位置。周堀線はRからLへ斜向する。
墳丘、周堀ともに非対称の築造企画が定
着し定形化し、コナベ古墳型の「片直角
型」築造企画の標準となる。

に伝承されていて、河内湖をめくり築造企画を共有する擬制的な同一系譜に属する有力首長層の連合として、一つの政治地図の復元ができる¹⁰⁾。

その他、地域や時期を超えて、福岡県御所山古墳¹¹⁾、群馬県綿貫観音山古墳¹²⁾などにも伝播、伝承されていて、そのほかにも類型が増える可能性が指摘される¹³⁾。

(3) 非対称墳丘の様式的肥大化

ここに例示する片直角型非対称墳丘をもつ前方後円墳は、コナベ古墳型非対称墳丘を築造企画のベースにしながら、さらに一方の前方部隅角を肥大かさせるように張り出させ、墳丘の非対称性を誇張し様式化させた築造企画のもとに築造されている類例である。

ここで例示した古墳は左右対称に築造するべくして築かれた墳丘が、造営の過程での「誤差」に

よって歪んでしまったようなものとは到底みみなすことのできない非対称墳丘を呈し、あきらかに造営当初から特異な左右非対称の墳丘を意図して築造している類例である。

①別所大塚山古墳（奈良県天理市）

天理市石上町の丘陵から南西に延びる尾根を利用し、主軸線をほぼ北東にとり築造されている。前方部正面側で尾根を切通し状に切断して前方部を形成し、後円部を平地側に位置するように築造されている。墳丘の右側は崖状地形で現在は池になっているが、墳丘右側の基底部をこの崖状地形いっぱいには設定して築造している。

前方部右側隅角を「片直角型」に収まるように築造し、前方部左側隅角を非対称に大きく張り出すように築造企画している。墳丘の左側に後円部のほぼ主軸線の位置から墳丘左側面、前方部左隅角にかけて完周しない周堀を廻らせ、本古墳は墳丘左側面を正面観とする築造企画のもとに造営されていることが指摘される。

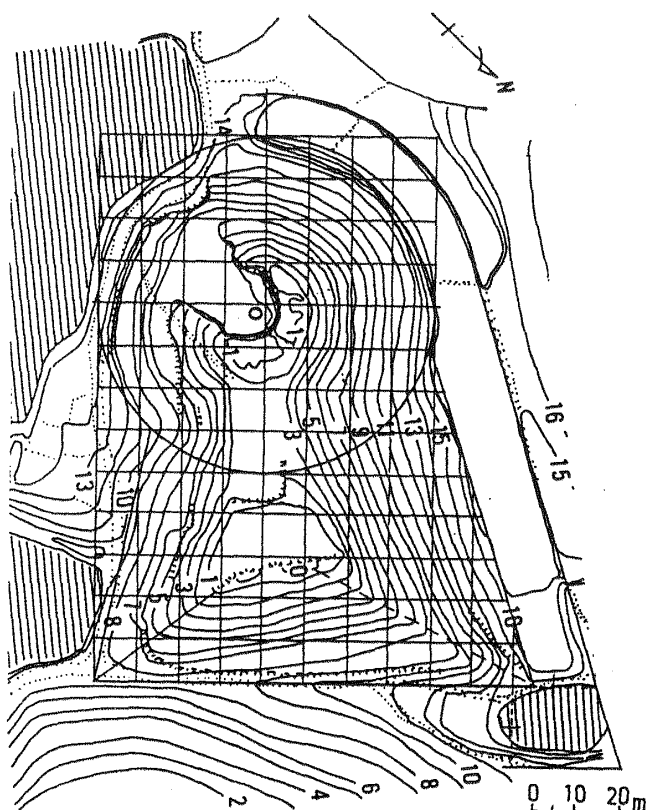


図4 別所大塚山古墳の築造企画の推定復元
5区型、1区6ヒロ、1ヒロ約160センチ
墳丘の左側面が正面観になる。右側は崖状地形

後円部は横穴式石室を破壊した大きな盗掘孔があり、前方部前端は丘陵を切通して形成しているため、前方部正面の墳丘斜面は墳丘左側方向に斜向するように段築を整形している。

本古墳の築造企画の推定復元は5区型、1区6ヒロ、1ヒロ約160センチであるが墳丘計測値¹²⁾と復元値()の対比は、後円部直径75メートル(8区・76.8メートル)、墳丘長115メートル(13区・124.8メートル)、前方部幅90メートル(10区・100.8メートル)。

墳丘の高さの企画性については、尾根筋を切断し墳丘左側を正面観として雄大さを強調しているため、後円部右側面と左側面では約3メートル前後左側の墳丘基底部が低く、前方部で右側面より左側面が約8メートル前後墳丘基底部が低い。

したがって、後円部高さ15メートルは墳丘左側の高さで(1.5区+1ヒロ・メートル)、墳丘右側では約13メートル(1区+2ヒロ・12.8メートル)、前方部高さ8メートル墳丘右側の高さで(5ヒロ・8メートル)、墳丘左側では約16メートル(1.5区+1ヒロ・16メートル)となる。

本古墳の時期は、6世紀中葉前後が想定される。

②アカサカ古墳(奈良県大宇陀町)

宇陀地域には周辺の丘陵・山間部にかけて小形の前方後円墳が多く分布するが、アカサカ古墳は5区型、1区2.5ヒロ、1ヒロ約160センチの築造企画をもつ「片直角型」前方後円墳で、墳丘規模としては現在測量調査された前方後円墳の中では、4区型、1区2.5ヒロ、1ヒロ約153.3センチの築造企画をもつ平井宮山古墳とともに、最大の企画性を示す。

本古墳の立地は、丘陵頂部を利用して築造されているが、墳丘の右側面は急傾斜の深い崖状地形に面し、前方部右側隅角を「片直角型」におさまるように築造し、墳丘左側面を小盆地状に開いた地形に面するように築造企画されている。

現在、左側面から後円部後方にかけて農道が墳丘基底部を削るように通っているが、前方部左側隅角が大きく張り出して非対称前方部を形成している。

別所大塚古墳と共通する立地を利用し、同様に

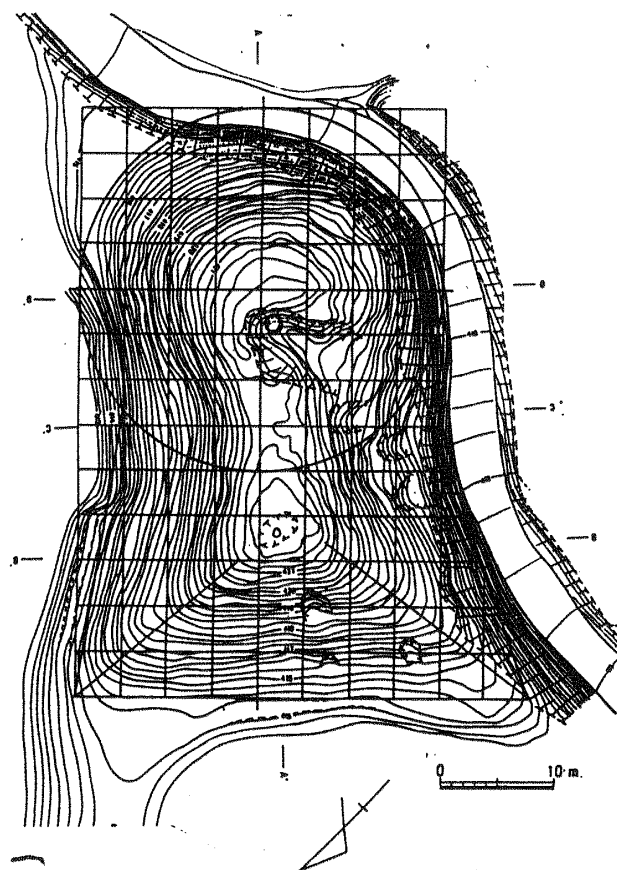


図5 アカサカ古墳の築造企画の推定復元
5区型、1区2.5ヒロ、1ヒロ約160センチ
墳丘の左側面が正面観になる。右側は崖状地形

墳丘左側を正面観とする築造企画であることが指摘される。

墳丘計測値と復元値()との対比は、後円部直径29メートル(8区・32.0メートル)、墳丘長51.5メートル(13区・52.0メートル)、前方部幅39メートル(10区・40.0メートル)、後円部高さ6メートル(1.5区・6.0メートル)、前方部高さ6.5メートル(1.5区+1/2ヒロ・6.8メートル)の推定復元ができる¹⁴⁾。

本古墳の時期は、6世紀中葉から後半が想定され、宇陀地域が大和と伊勢を結ぶ交通の要衝にあり、大和国中(くんなか)の政治勢力に従属しながら、その東側の縁辺を固める小豪族集団として、別所大塚古墳の有力首長層との関連が注目される。

③非対称墳丘の築造企画の伝承

このような特異な非対称墳丘がどのように伝承されてきているのかを検討してみよう。

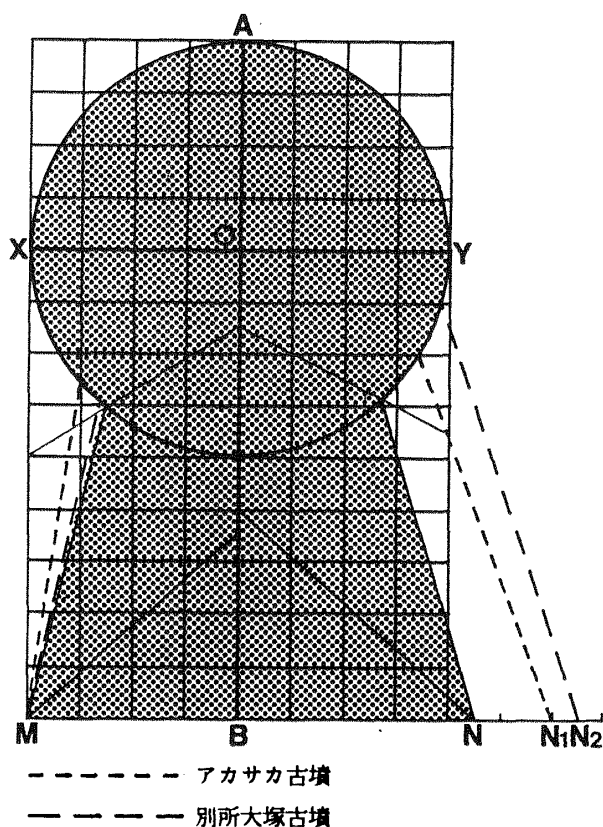


図6 コナベ古墳型「片直角型」前方後円墳を
ベースにした特異な非対称前方後円墳
アミ目のスクリーントーンがコナベ古墳
破線が別所大塚古墳、点線がアカサカ古墳

図6のアミ目のスクリーントーンで示したのがコナベ古墳の平面の築造企画で、この上に1区の大きさを同大にした別所大塚古墳とアカサカ古墳の築造企画を重ねてみると、特異な「片直角型」墳丘の設計は、左側前方部側面を異常に張り出すことで形成されていることがわかる。コナベ古墳の前方部正面の左前方部隅角の位置Nに対して、アカサカ古墳では1.5区外側のN₁の位置。別所大塚古墳では2区外側のN₂の位置に前方部隅角を設定し、前方部左側側面を異常に張り出させて築造している。

墳丘右側の前方部隅角Mの位置は3つの古墳ともおなじ位置で、このMが「片直角型」前方部を形成するキポイントになり、そして前方部側面は3つの古墳間にそれほど大き開きはみられない。

このように築造企画から非対称墳丘に検討を加えてみると、特異な「片直角型」非対称前方後円墳も、定形化した基本的な前方後円墳の築造企画

をベースにしていることが指摘され、時間と地域を超えて基本となる築造企画が伝承され記憶されていたことを示唆している。

(4) 非対称墳丘築造企圖の意義

非対称墳丘の定形化の圍期

これまで検討を加えてきたように、左右非対称の墳丘をもつ前方後円墳が存在する事実はは動かし難いが、これまでに例示した非対称墳丘をもつ前方後円墳は、非対称墳丘を様式的に誇張した築造企画によって造営された古墳である。

本来、非対称墳丘の出現は、墳丘本体は基本的に左右対称に築造企画されながら、「付帯部」や「張り出し部」を付随させることによって全体としては結果的に非対称に造営されている前方後円墳も存在する¹⁵⁾。

前方後円墳の墳丘そのものが同一平面で完周する周堀によって「鍵穴型図形」として定形化する画期は、河内では津堂城山古墳を嚆矢とし、大和では宝来山古墳、島の山古墳、巢山古墳などがあげられる。

これらの古墳はともに、4世紀後半から末期の時期が想定され、古墳時代前期から中期への過渡期に相当する大形前方後円墳で、造出し以外はそれまでの古墳が墳丘に付随させていた「付帯部」や「張り出し」部分を墳丘から切り離したり、周辺部に配置するなど形式化が一段とすすみ、墳丘を鍵穴型図形の定形化を達成した築造企画のもとに造営された前方後円墳とみてよいだろう。

4世紀代では最大の築造企画を示す渋谷向山古墳(景行陵)では、後円部後端と前方部前端との比高差が約15メートルもある傾斜地に、後円部直径約170メートル、墳丘長約298メートル近い巨大な墳丘を破綻なく築造し、後円部は段差を付けながらも正円になるように造営している築造技術と高度の技法水準をを検証してきたが¹⁶⁾、大和とその周辺部の古墳造営技術がいっそう成熟してきた4世紀後半から5世紀にかけての時期に、本来は左右対称に造営するべくして築造をはじめた墳丘を、前方部に限って不用意に非対称になるような誤差を生じさせる施工をするとはとても考えられない。

やはり、造営当初の築造企画の段階から、非対称に墳丘を築造する意図のもとに、墳丘を築成したとみるべきであろう。

(5) 非対称墳丘と倭人の精神世界

山頂や丘陵地形を利用して造営された古式前方後円墳や前期の前方後円墳では、本来左右対称の築造企画で築造されるべきものが、地形に左右され立地の制約のために結果として非対称の墳丘になってしまっている可能性も捨て切れないとしても、そうした制約のない立地に造営されて古墳が明確に左右非対称に築造されている場合は、左右対称に築造するべくした墳丘が、築造企画の地割から築造施工の過程での「誤差」の累積によって、結果として非対称墳丘ができあがってしまった、という説明しか与えられてこなかった。

左右対称に築造する余地が十分ある立地ないしは地形にもかかわらず、なぜ非対称の墳丘を築造したのか、古墳祭祀や葬送儀礼などの問題だけでなく、古墳文化の根源にもかかわる問題がその背景には存在する。

定形化した前方後円墳が造営される時代は、一般的にいつて被葬者になるべき首長の死によって古墳の造営が始まるのではなく、生前のある時期から造営が始まる「寿陵」である可能性が指摘される¹⁷⁾。

古墳の造営とは、死せる首長を単に埋葬する墓ではなく、権力の誇示や首長の霊力を具現化し象徴するモニュメントとしての性格が指摘され、古墳時代社会における階層的身分秩序を墳丘の規模に表した道具立てという側面が語られることもある。

そこでは、大王の居館ともみられる大形建物遺構やその権力の強大さを示す大形倉庫群、または地方の豪族居館など、日常生活にかかわる建造物と違う点として、古墳そのものは「死」にまつわるものであり、「ハレ」や日常的な「ケ」に対して「ケガレ」の世界を象徴するものであることが指摘される。

葬送儀礼など「ケガレ」にまつわるものを概観した場合、底部に穿孔して器本来の機能を欠かした土器や、供献する土器をわざと砕いたり、武

器では曲げたり折った刀剣を副葬した事例など、「ケガレ」にまつわる「タダナラヌトキ」の儀礼には、日常に用いる「全き」ものに対して、意図的に「欠けた」ものをわざわざ祭器として作成したり、全きものをわざと欠かして「ケガレ」の儀礼に対応させるという慣習のあることがクローズアップされてくる。

古墳そのものも、政治的権力や霊的な力を体現している首長が死の局面を迎えたとき、支配傘下にある成員にとってかけがえのない首長の霊力や権能が「ケガレ」ることに備えるための「明器」的存在であったことをあらためて指摘したい。

このようにみると、日常的なものではないものを象徴した「ケガレ」の存在として、意図的に左右非対称の築造企画で古墳を造営した倭人の葬送儀礼にまつわる精神世界が垣間見られる。

したがって、非対称墳丘を造営の過程の中で積み重ねられた誤差の累積の結果生じたものとして考えるだけの技術論的な視点だけでは、古墳造営を社会の階層的身分秩序を具現化したものとして古墳時代社会を構築してきた倭人たちの、思想や精神世界をふくめた古墳文化の全体像を見誤ることになる。

それでは、完全に左右対称の墳丘をもつ前方後円墳についてはどのように考えられるか。

拙論の大山古墳の地割実験で例示し検討を加えたように、墳丘が左右対称に築造された前方後円墳も、その古墳全域では非対称部分が存在し、全体として非対称の築造企画が周辺部に様式化して存在していることを提起した¹⁸⁾。

これは、それぞれの前方後円墳の正面観や古墳祭祀ともかかわる問題をふくんでいるので、古墳の調査は埋葬施設の発掘や墳丘の調査だけでなく、周堀、外堤など全域の調査に遺漏があってはならないことを示唆している。

つまり、古墳の調査は主体部や墳丘の主要部分だけでなく、墳丘も含めて造営当初の全域をカバーする調査がおこなわれて、はじめてその古墳がどのような意図の築造企画のもとで造営されたか、という意義を解明する資料が揃うことになるといえる。

したがって、墳丘本体が左右対称に築造されて

いたとしても、非対称部分が外域部分に様式化されて移行していることをも築造企画の面から解析していく必要性が指摘されるところから、墳丘の左右非対称、あるいは左右対称の問題も墳丘だけに限定して論ずるのではなく、古墳全域にまで視点を広げてみていかなければならないといえよう。

本稿では、特異な「片直角型」の非対称の築造企画を明確に示している類例を例示して、前方後円墳の築造企画や尺度論を検討する場合、「前方後円墳は左右対称図形である」という先入観や前提を払拭して、外形観察を十分におこなう必要のあることを提起した。

(以下次号)

註

- 1) 石部正志・田中英夫・堀田啓一・宮川 彬「前方後円墳築造企画の基準と単位」『考古学ジャーナル』第150号 特集「古墳の企画性」1978年
- 2) 註1)前掲書27頁
- 3) 宮内庁書陵部陵墓課「平成4年度陵墓関係調査概要・安閑天皇古市高屋丘陵整備工事区域の調査」『書陵部紀要』第45号 1994年
- 4) 宮川 彬「高屋築山古墳の築造企画の検討」『橿原考古学研究所設立60周年記念論集』近刊 に掲載予定
- 5) 宮川 彬「前方後円墳築造企画の『基準尺度』について」『橿原考古学研究所論集』第4 1979年
- 6) 石部・田中・堀田・宮川「宇陀地域の前方後円(方)墳の築造企画試論」240頁『大宇陀地域における古墳の研究』宇陀古墳文化研究会編 1995年
- 7) 福井県上中町の十善ノ森古墳や1997年8月に調査された大阪府羽曳野市蔵塚古墳なども「片直角型」前方後円墳の可能性が指摘される。『蔵塚古墳の調査』大阪府文化財調査研究センターの現地説明会資料 1997年8月2日
- 8) 宮川 彬「築造企画からみた前方後円墳の群集構成の検討ー巨大古墳の出現とその背景ー」『橿原考古学研究所論集 第6』1984年
- 9) 石部・田中・堀田・宮川「畿内大形前方後円墳の築造企画について」古代学研究, 86 1979年

10)註8)前掲書

- 11)宮川 彬「前方後円墳築造企画と技法の伝承性」『橿原考古学研究所論集 第8』,1988年
- 12)宮川 彬「築造企画からみた毛野の一首長墓の性格ー綿貫観音山古墳をめぐるー」古代学研究, 100 1983年
- 13)兵庫県姫路市壇場山古墳は、実測図が公開されていないので最終的な結論は差し控えたいが、航空写真を見る限りでは前方部正面の周堀が斜向するなどコナベ古墳型の非対称墳丘の可能性が指摘される。
- 14)註6)の前掲書240頁図110
- 15)箸中山(箸墓)古墳・註9)前掲書の第9図参照。1995年の調査によって、前方部右側面部(北側)の墳丘基底部外側に幅約10数メートルの葺石をとまなう「付帯部」が発掘され、墳丘の右側面の荘厳化を強調していたものとみられる。橿原考古学研究所・「桜井市箸墓古墳(纏向遺跡第81次)発掘調査概報。あるいは、墳丘は左右対称の大山古墳は、二重堀から外堤にかけて右側(西側)と左側(東側)が微妙に幅の取り方に差異が認められる。また、後円部側外堤上にある陪塚の大安寺山古墳と茶山古墳の配置を非対称にすることによって、主墳の周囲に様式化した非対称部分を配置する築造企画をとった可能性が指摘される。
- 16)宮川 彬「前方後円墳の築造企画と単位(2)」計量史研究 No. 18 1995年
- 17)日本書紀の「仁徳天皇六十七年冬十月」の条には、「仁徳天皇」が自ら河内の石津原に行き陵地を定めた、としている。これは古墳時代の古墳撰地の実態を必ずしも示したものとはいえないが、日本書紀が編纂された当時の人びとの意識に、古墳造営は「寿陵」という性格をもつものである、という認識があったことを示唆するきわめて興味ある説話といえよう。
奈良県桜井市のメスリ山古墳や天理市の中山大塚古墳調査では、墳丘と埋葬施設が時間的経過をおかずに一気に造営されたのではなく、墳丘の大かたを築造してから、埋葬施設の構築の完了までにやや時間的経過があったのでは

ないか、というような土層の観察がなされていて、それらの古墳の造営が被葬者たる首長の死によって始まるのではなく、それ以前の段階（つまり生前）から墳丘造営が始まっていた可能性を示唆しているようである。

- 18) 墳丘、周堀、外堤をふくめた全域が非対称の築造企画で造営された古墳と、墳丘は左右対称に築造されていて外域部が非対称の築造企画を示す古墳間には、古墳築造上の技法や工法の違いと

いった技術論的な枠を超えた、系譜性や古墳祭祀の在り方を異にするといった差違を古墳外形に表徴させるという意義がそこにあったのではないかと考えられる。

したがって、前方後円墳に象徴される古墳時代社会は、一元的な支配と被支配関係や身分秩序の枠で整然と「くくる」ことのできる社会ではなく、複数の支配系統がゆるやかに存在しえた社会であった可能性を示唆している。

Construction and Unit of Keyhole-shaped Burial Mounds (4)

Susumu MIYAKAWA

Discussions concerning the configuration of keyhole-shaped burial mounds have often been carried out on the overall premise and preconception that they conform to a "bilaterally symmetrical figure." However, detailed observation of surveyed drawings and the results of tumulus surveys have revealed that a surprisingly large number of keyhole-shaped burial mounds are bilaterally asymmetrical. If anything, keyhole-shaped burial mounds that possess a completely bilaterally asymmetrical configuration in the true sense of the word are rarely found. Even in cases where the tumulus is bilaterally symmetrical, the overall configuration including moats and outer embankments is asymmetrical in certain cases.

In this paper, we have shown examples of types of bilaterally asymmetrical tumuli that are particularly distinctive among keyhole-shaped tombs for their characteristic construction, which features rectangular corners at the section front end and exaggerated bulges at the other.

The existence of keyhole-shaped burial mounds with stylized asymmetrical tumuli conceivably accounts for actual conditions in the period of burial mounds, such as varying burial mound religious rites due to the differing tumulus configurations, the non-uniform nature of their genealogy or systems of rule, or other such conceivable conditions.